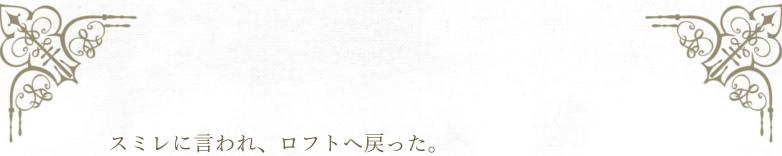




## 四日目追加 HOマリー







スミレに言われ、ロフトへ戻った。 魔法をかけられて、苦しんでいる人がいる。 それがこんな身近にいるなんて思いもしなかった。 スミレからしたら相手は『悪い魔法使い』だ。 けれども、彼に魔法をかけたいと願った人間がいて、魔法 使いはそれを叶えたに過ぎない。

-魔法を扱う者がおそれられるのも当然だ。

スミレの話を聞いてから、ずっと頭が重い。 企みを持つ人間のこと、魔法のこと、スミレのこと。 それらすべてがのしかかってきて、うまく思考が巡らない。 寝衣に着替えてベッドに横になる。 もう眠ってしまおう、そう思い、無理やり目を閉じた。

夢をみた。

流れ星が降る夜、魔女になった私は空を飛んでいた。 空はきれいで、星は近くて、たのしい。 けれども、そんな私を指さす人々がいた。

「悪い魔女がきた」 「村を滅ぼされてしまう」 「いなくなってしまえ。早く、早く」

「魔女なんてきらいだ」

目が覚めた。

最後に話した人の声は……たしかにスミレだった。 寝汗がひどい。





夢だ。

夢の中のことだ。

そうは思っても、動悸が収まらない。

ふと、読むのを止めた日記に目がいって、ページを開く。

『五日目。夢見が悪い。』

書きなぐったような字で、それだけ書かれている。 ああ、本当に、嫌な夢だった。

汗を拭いたくて下へおりた。

水を汲みに外へ出る。

日の位置を見るに、お昼前だろうか。

スミレはいなかった。

夢のせいで、どんな顔で会えばいいのかわからなかったから、いないことに安堵する。

避けられた土砂や倒木が端に積まれていて、たった一人でこの量を撤去したことに驚いた。

彼にかけられた魔法の脅威を知る。

とても、人間にできる作業量ではなかった。

魔法をかけられた人間は忌み嫌われるといわれているけれ ど、スミレに対する態度は絶対に変えたくはない。

はじめて会ったときから、スミレはスミレだ。

水を持ち小屋へ戻ると、テーブルに置いていた果物の中から、リンゴだけがなくなっていた。 リンゴが好きなのだろうか。



それにしても、休憩をとるように言っておいてよかった。 彼がいくら肉体労働に慣れているとはいえ、つらい思いや 大変な思いをしてほしくはない。

魔法のせいで苦しめられた彼のことを思うと、やはり、後 ろめたさや罪悪感が襲ってきた。

魔法のせい――つまり、魔法が使える魔女だったらそれを どうにかすることができる?

ふいに過ぎった考えは、沈んでいた私の心を一気に浮上させた。

沸かしたお湯を持ってロフトへあがる。

体を拭き、ワンピースに着替えたあと、すぐに本を漁りはじめた。

なにか魔法を解く内容が書かれた本はないだろうか。 これでもない、それでもないと本を開いては読み、閉じて いく。

気づけば日も傾き、お腹も空いていた。

本に夢中になっていたから、スミレが今なにをしているのかわからなかった。

ロフトの窓から外を見ると、姿がない。

そういえば、今日はまだ一度もご飯を作っていない。

私は急いでロフトをおりた。



